



Title	「哲学カフェ in 明治学院大学」報告・提言の対話
Author(s)	木下, さくら; 西川, 勝
Citation	臨床哲学のメチエ. 2003, 12, p. 7-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7206
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「哲学カフェ in 明治学院大学」

報告・提言の対話

木下さくら / 西川勝

2003年6月7日(土)に、明治学院大学白金校舎で行われた哲学カフェについて、参加したナース二人が対話風に報告します。

まず、今回の参加が、初めての哲学カフェ体験になった木下さくらさんの感想から。

木下さくら 西川 勝

「哲学カフェ」なるものに、初めて参加した。

哲学カフェという言葉も知らなかったし、哲学にはまるで縁がなかったわたしが何故、哲学カフェに参加したかというところ、きっかけはひょんなことだった。わたしは、精神科ナースのための研修会や学会の企画・運営などの仕事をしているが、昨年、痴呆ケアの研修会講師として西川勝さんをお願いしたことがあった。彼から突然お誘いをいただいたのである。メールのタイトルが「哲学カフェのお誘い」だったので、かなりびっくりし、わたしなんかが行ってよいのか？と



思ったりもした。職場の友人も誘ってみたが、誰一人として都合がつかなかった(余談だが、西川さんは研修会の資料として臨床哲学の修士論文を送りつけてきたことから、わたしの職場では「ちょっと変わった人」だと認識されている)。しかし、お気軽にどうぞ、とのことだったので、一人で明治学院大学へと向かうこととした。初めてのことで、わくわくしていた。

大学の講義室に机がいくつかの島に並べられ、お茶やお菓子が置いてあった。そうか、哲学カフェだからね。さておき、どうやら哲学カフェというものは、ひとつのテーマについて色々な視点からディスカッションするものらしい。ファシリテーターの寺田さんが進行役のようだ。人の意見をきちんと聞く、とか長々と人の言葉を引用しない、とかいうルールがいくつか設けられていた。鷲田先生の著書の一部をとっかかりにして議論が始まった。「ある人が『死にたい』と言ったとき『ほんなら、死ね』と言うことがある。その人はもう頑張れない自分を否定してほしいのだと思うから」という内容だったと思う。「死ね、という言葉はひどく暴力的な言葉だと思う」とか「関係性によるのかも」とか、その他いろいろな意見がとびかった。わたしは、それらの意見に対し、いちいち「そうだ、そうだ」「んー、それは賛同しかねる。」「これはどういう意味なのか？」など、内心は反応していたが、じっと様子をうかがっていた。

わたしは、どちらかというと言いたいことは言うタイプで、あまり遠慮してものを言う方ではない。発言しないのは、どうしてもグループの力動が気になってしまい、自分の話すことをまとめたりする暇がないからなのだ(もともと弁のたつ方ではないし)。グループの空気の流れだとか人間関係などが気になる。特に、話題の表舞台にたっていない人が気になる。発言が少ない人だとか、勇気を出して話している風な人の意見はついつい丁寧に聞く。逆に、そういう人をないがしろにする人には、怒りすらおぼえる。今回、いろいろな人が来ていたと思うが、こういう場合、慣れていない人が絶対的に不利である。大体、この「不利」というわたしの見方は偏っている。みんながしゃべりたいわけではなかろうが、わたしには、控えめにしている人が「話したいのに話せない人」に写るのだ。とにかく、わたしの偏った持論からいうと、関係者は、グループや控えめな人を気遣うべきである。

そういう意味で、寺田さんという人は、かなりのキレモノと思われた。うまい具合に意見を要約したり、話題をふったりしていた。そのうち、西川さんが母親から「生きていてと頼んだわけではない。ほんなら死んでしまえ」と言われたことが、逆に自分にとってはよかった、という話になった。かなりインパクトがあり、興味をひく。しばらくその話で盛り上がった。「傷つけるケア」というのも、わたしはそのような考え方になじみがなかったので、おもしろかった。相手を傷つけることがケアになることもある、という考え方。わたしは、相手を傷つけることは、傷つけるだけになることが実際には多いと思う。特に医療(とりわけ精神医療)の現場においては。その中で、傷つけることがケアになるための条件というのは何なのか? 偶然のこともあるだろうし、冒頭の題材となった文章は意図的な「傷つけるケア」だろう。傷つけることがケアにならない可能性があるとき、意図的な「傷つけるケア」は危険ではないのか。また、ケアになっていたことを確かめるにはどうすればいいのか……。

そんなことを考えるのと同時に、今日のテーマは「ケア」なのに、意図的に「傷つけるケア」がテーマになっている、と思い始めた。わたしのように「傷つけるケア」について、今初めて考える人たちはどんな風に考えているのだろうか。それが聞きたいと思ったが、このグループでは、西川さん始め「傷つけるケア」賛成派の意見が強い。「傷つけるケア」自体は興味深いが、反対派ではなく、初めて派や一部賛成派の意見も聞きたい。

また、寺田さんのファシリテーターは流暢だったが、西川さんに頼っている感じがする。一度そう思いこむと、もうだめだ。ただでさえ意見の強い西川さんに、さらに意見を求めているように思えてくる。

わたしは内心、「黙れ、西川」と思った。何度も思った。……どうも、すみません。

西川 勝 木下さくら

いやあ、のっけから強烈パンチを食らいました。しばし、沈黙黙考。

木下さんはお仕事柄、ナースの研修などで、グループワークの方法論にはご意見がおありですね。グループでの対話が実りのあるものになるためには、参加者が自らの体験を具体的に語ること。それも言い難かった事柄について、それをしっかりと聴いてくれる人がいることに支えられながら、自分の考えをまとめ表現することが、何よりも大切だと、あなたからお聞きしたことがあります。

声の大きい強い論理が勝ちを得る議論や討論と違い、対話はそこに居合わせた人たちが、どれだけのことばを紡ぎだせるか、お互いが縦系横系になりながらひとつの織物を、ともに作りあげることができるかが大切になるのですね。

その意味では、ぼくはしゃべりすぎたのでしょう。「傷つけるケア」など矛盾した考えだ、という意見に添うつもりもなく、戦闘的に自分の意見を主張しましたからね。意見のぶつかり合いに見えたのも仕方のないことだったと、今は思います。

あの日の哲学カフェは、大学の教室で黒板を前にして行われるという状況だったことに、ひとつの理由があるのかもしれませんが。ファシリテーターの寺田さんが大学の先生で、参加者に学生さんが多かったことも、カフェという自由な雰囲気からは遠いものを醸し出してしまいました。2時間近い対話が休みなく続けられ、緊張した稠密な時間の流れに参加者はのみ込まれてしまったようです。哲学カフェが始まる前からの緊張を解きほぐせなかった、というのが今回の反省点としてあげられると思います。ぼく自身も、寺田さんから誘われて大阪から東京へ出かけてきたからには、と妙な気負いがあったのも確かです。その気負いで、人の話に耳を傾ける余裕をなくしてしまいました。哲学は、意見の主張ではなく吟味の継続です。お互いの違いだけを際立たせるのでは、互いに吟味しあう場所は開かれませんか。

吟味を継続するために必要なことはなんのでしょうか。なによりも大切なことは、「途上にある」ことの自覚だと思います。実際の哲学カフェは、ある時間に始まり、ある時間には終わりを告げられます。限られた時間の中では、対話が深まらず空転してしまうこともあります。自分の考えを言えなかった、相手の言うことがわからなかった、という不全感も襲ってきます。みんなで考え始めた問いを、開いたまま終わってしまうのはしんどいことです。しかし、安易な合意や答えに寄りかかる怠慢は「哲学の死」を意味します。

「哲学なんか関係ない」と言われるかもしれませんが、ナイチンゲールも「看護は日々新たになければならない」と語ります。人が生きるうえで、何かを求めるということが、何かを得たということよりも、より大きな生きる力になるのではないのでしょうか。

当たり前のように思っていたことが、哲学的対話のもとで新たな光を発しはじめ、その意味を再び考えたくなる。それが、ぼくの考えている「哲学」です。

また、悪い癖が出たようです。ぼくの哲学観の主張は、木下さんやほかの参加者が、感じたであろう「あのときの息苦しさ」を忘れていきますね。少しでも、これからの哲

学カフェが楽しい場になるために、いくつかの提言をしたいと思います。

* 緊張を解くには：場所の工夫（本物の喫茶店、屋外の公園、出入りの自由なところがいい）、時間（余裕を持って参加できる時間帯、土曜の午後とか）、環境（静か過ぎない、騒がしくない、目を休める絵や花、小物などがある）、席（全員が、同じ方向を向かない。人の視線が気にならない。居場所をある程度自由に移れる）、美味しい飲み物。気持ちよくそこにいられて、対話に集中することも可能だし、黙っていても気詰まりにならない雰囲気があること。その場にいることが苦しくないやになれば、楽に離れられることがポイント。

* 沈黙に躓かない：破るための沈黙と、そうではない沈黙との区別をどうするか。ファシリテーターだけでなく参加者が、それをどう感じ取り、どうするのか。あらかじめ話し合っておく。

（沈黙からことばが生まれるのを待つ場合、話の流れがよどみ迷った場合、話したくない人なのか、話せないと感じているのか、その他）

よりよい哲学カフェのためには、もっと多くの課題があるでしょう。ファシリテーターのスキルに関しては、参加者のことばと沈黙をどのように絡ませあうかという難題があると思いますが、今回は、ぼく自身にそれを語る資格はありません。

またまた、木下さくら 西川 勝

誘っていただいた身なのに好き勝手を言いまして、申し訳ありません。こんな風には書きましたが、西川さんが人の話を全然聞いていなかったとは思っていません。西川さんの、人をひきつける言葉にちょっぴり嫉妬したのかもしれないですね。考えてみると、年月がたつにつれ、「心地よい驚き」が少なくなってきたように思いますが、哲学カフェにはそれがありました。わたしの行動範囲では決してめぐりあえないような考え方に触れ、うれしいびっくりをたくさん体験しました。目からウロコとよく言いますが、目新しいことを聞くだけでなく、その目新しいことについてその場で考え、ディスカッションできる場というのは、そうそうないと思います。間違いなく楽しい時間であり、後日、わたしは友人にこの日の出来事を熱く語っていました。これからも、哲学カフェが身近なところでひらかれることを楽しみにしています。

最後に、哲学カフェでお会いした皆さん、楽しい時間をありがとうございました。

西川 勝 木下さくら

こうして、文章で対話するというのも面白いものですね。哲学カフェには、まだまだ見つけられていない魅力的な方法があるように思います。また、テーマによっては参加者の感想も、ずいぶん違ったものになるでしょう。今回の「傷つけるケア」は辛口で毒のあるテーマでしたが、「恋愛」や「自由」についての哲学カフェもあります。本当は、参加した人たちが興味のあるテーマを決めるというのがいいのでね。

ぼく自身は、あらかじめテーマが決まっているのは、気に入りません。偶然性をどれだけ大切にできるかが、哲学カフェの自由さを守れると思うからです。

見知らぬ人と語り合うことのなかで、今まで知らなかった自分にも出会ってしまうという経験こそが、哲学カフェの醍醐味なのかもしれません。真剣な対話が続くうちに、なじみの人にも全く別様の出会いをします。人と会うことでしか自分を知りえない。哲学にとっての対話の意味も、ここにあるような気がします。

木下さんは、ナース以外に三味線弾きの横顔がおありですね。浪曲の相三味線をプロの師匠に弟子入りして修行中。最近は舞台にも登場しているのを存じています。

浪曲の魅力を存分に引き出す相三味線は、譜面もなく、相手の浪曲を聴きながら即興的に弾くのだと教えられました。浪曲と三味線は、曖昧模糊と融合するわけではなく、それぞれの持ち味をしっかりと表現しながら、それでもお互いがいなければ成り立たないほどに緊密な関係にある。孤立にも依存にも流れてしまわない相互関係は、対話にとっても重要な示唆を与えるものでしょう。



また、機会があればこのあたりのことを話してください。いつか、関東での哲学カフェで再会できることを楽しみにしています。

（きのしたさくら 社団法人日本精神科看護技術協会 教育認定部長）

（にしかわまさる 京都市長寿すこやかセンター 研究助手）